

印刷してもらふことになるだろう。

いつそれが出来るか。文字が自動的でしかも経済的に電子計算機の中に入れられる文字読取が完成し、フィルム検索又は電子印刷が経済的になり、それよりも人間の言葉と電子計算機の言葉とがうまくマッチするようになったときである。

そのときには電子計算機の記憶容量も大きくなっているだろうし、個々の人間相手のおそい会話も経済的に引合うタイム・シェアリング・システムの電子計算機が完成しているだろう。

日本文字の漢字をどうする、それが自動的に入るだろうか。そのような心配も当然であるが、ある程度の規模のときはそれほど決定的な困難はないものと思う。(工学部教授)

外国の大学図書館

ウィーン大学の図書館のことなど

安川 舜 朗

森とドナウと音楽の古都ウィーン——この典雅なたたずまいの中に現代ドイツ語圏の大学の中で最古の歴史を誇るウィーン大学(1365年創立)の壮麗な新ルネッサンス様式の本館がある。

カトリック神学、福音神学、法・国家学、医学、哲学の5学部を擁するウィーン大学には Universitätsbibliothek と呼ばれる総合図書館と、Bibliothek für Rechtswissenschaft と呼ばれる法学図書館の二つの図書館があるが、その他に各学部の多数の Institut がそれぞれの専門において独自の図書室をもっており、またザルツブルク郊外のヴォルフガング湖畔にある研修寮には大学が毎年夏ここで開く法文系集中講座のために Bibliothek für die Sommerhochschule(夏季大学図書館)が併設されている。

総合図書館は大学本館の正面玄関から哲学部に通ずる右側の大階段を登り、更に逆の方向に小階段を登りつめたところから始まる大回廊の最初の曲がりかどにある入口の大とびらを開けるとモダンで明るい Vorhalle がある。ここで先ず正面の携帯品預り所にコートなどを預ける。右側を少し上ったところはホールになっていて中央には戦後刊行書の分類カード台が整然と置かれ、周囲に並んでいるショウ・ウィンドウの中には各部門の最新刊書の実物が展示されている。左手の登録貸出関係事務所を経て小閲覧室に通ずる入口の横から階上に登るとぎっしりカード・ボックスの詰まった目録室の前に出、その右隣りが大閲覧室となっている。蛍光照明に改装された階下各室の軽快な色調に反して、大閲覧室の内部は入った瞬間異様に暗く重苦しい感じを与える。周囲の採光窓が書架でことごとくしやへいされている大広間に二百席以上の古風な机が黒々と続き、照明は各席ごとについている昔ながらの黄色い電球のスタンドだけである。しかしこうしたふんい気も慣れてくると不思議に落ち着いて感じられ、読書に集中力を与えるためか、毎日朝9時から夜の8時までの開館中いつ行ってもほとんど空席はなく、机を照らす電光の列は静けさということを除けば、フル・ムムバアが着席したオペラ座



ウィーン大学本館正面玄関(盛夏)

のオーケストラ・ボックスの感がある。

総合図書館はウィーン大学の教授・学生のみならず広く外国人を含めた一般人も利用することができるが、それだけに利用規則は複雑できびしい。例えば利用者として登録するには正規の内国人学生であっても学生証だけでは足りず、Polizeilicher Meldezettel（所轄警察への住民届）も添えなくてはならない。外国人の場合、旅券提示はもちろんのこと、借出しの際学生であれば邦貨で約1,400円、一般人であればその倍額をその都度保証金として納めなくてはならない。更に学生が卒業、転退学するに当っては総合図書館から、利用経験の有無にかかわらず、Entlastungsstempel（責任解除印）をもらわないと一切の手続は完了しない。こうしためんどうな規則を苦にもせず、大閲覧室には若い学生に混って革表紙の部厚い書物をひもとき、黙々と読みふけている老紳士や老婦人の姿が見かけられ、後で話かけられて初めて一般の人だとわかることがよくある。

花模様民族衣裳に身を包んだ女子学生も目立つ暖かく落ち着いたふんい気総合図書館に比べて、大学本館の左階上にある法学図書館の閲覧室は天井の裸の蛍光灯に長机という取り合わせて潤いに欠ける。しかしここも終日殆ど満席である。他の諸学部には各科のInstitutの中に図書室とともに学生の自習室が完備しているが、それのない法・国家部の学生は自然この図書館に集まって来ることになる。特にDoktor取得までに課せられる三つのRigorosum（口述試験）の行われる春と秋にはこれをそれぞれ控えた学生でいっぱいになり、閲覧室は熱気を帯びてくる。他方貸出掛の窓口は開館直後試験に出る参考書の借出しに集まる学生で長い列ができる。利用度の高い本は禁帯出として十数冊用意されているが、開館前から並んでいても手に入らないことがある。

法学図書館の利用規則も総合図書館に劣らざきびしい。先ず登録の際邦貨200円の手数料を納めなくてはならず、毎学期登録を手数料とともに更新しなくてはならない。しかもこの登録更新に当っては当該学期分の授業料が完納されていて、それに基づいてInskription（聴講登録手続）が完了していなければならない。こうして借出した図書の返還を怠ると督促状が舞いこみ、どんどん延滞料金を取られることになる。本を借出していつも感心するのはドイツ系の人々が本を非常に大切に扱うということで、図書館の本もいつもきれいで、落書きなどもないので実に気持がいい。

オーストリアの学生は図書館を実によく利用する。これはひとつには彼らが、西欧諸国の学生と共通して、必要不可欠な講義プリント以外に一般にあまり本を買わず、もっぱら図書館で借りて読むということによる。図書館とは彼らにとっては先ず蔵書を借出すところであり、その結果として閲覧室が彼らの勉強場所となる。

この他にウィーン大学では入学初年度からPflichtübung, Proseminar等の初級演習が必修科目として各学部の講座に組まれ、学生はそのために多くの参考書を読んで資料を集め準備しなくてはならない。哲学部の美術史専攻の学生はそのために学外の美術館を歩き、演劇学や音楽学の学生は劇場やオペラ座のけいこ場に向いて資料集めをすることもある。こうして学生は講義プリントの他に早くから多くの参考書や資料になじまされ、従って図書館へ行くことを毎日の重要な日課とせざるを得ないように教育されて行くのである。

このようにウィーン大学の学生生活と切っても切れない図書館の利用状況であるが、大学側はいろいろ難問をかかえている。書庫における蔵書の、閲覧室における学生の激増に伴う収容力の問題から総合図書館を新築して独立させることは早くから関係者の課題となってい

るが、未だ解決を見ていない。われわれ外国人にとって不便なのは蔵書がドイツ語圏の文献を中心に整備されていて他の国語のものが少ないことである。また蔵書については例えばウィーンが生んだ限界効用学派の世界的経済学者カール・メンガーの全集がそろっていないことなどは惜しまれてならない。

ウィーン人の生活はおしなべてアダージオのテンポで展開する。学内事務や図書館もその例にもれない。ウィーン大学に入学してしばらくはこうした内国人にとっては至極当然のリズムにしばしば惑わされ、また歴史ののしかかるような重圧を感じさせる総合法学両図書館も私には当初何となく近寄り難いものがあったが、二年の歳月が流れた今となっては総合図書館の入口にいつも植えこんである紅い花が、法学図書館の大とびらのきしむ音がなつかしい思い出である。

(法学部大学院学生、昭和40年10月から2年間政府留学生としてウィーン大学に留学)

資料紹介

○ 教官文庫 (4月より本号発行までの御寄贈分)

- 「虚像の鳩」 高安国世(教養部教授)著 白玉書房 昭43
 「アジアの革命」 高坂正堯(法学部助教授)等著 毎日新聞社 昭41
 「宰相吉田茂」 高坂正堯(法学部助教授)著 中央公論社 昭43
 「経済学と歴史意識」 出口勇蔵(経済学部教授)著 ミネルヴァ書房 昭43
 「やきもの技術・生活・美学」 吉田光邦(人文科学研究所助教授)著 日本放送出版協会 昭41
 「日本の職人像」 吉田光邦(人文科学研究所助教授)著 河原書店 昭41
 「お雇い外国人②産業」 吉田光邦(人文科学研究所助教授)著 鹿島研究所出版会 昭43
 「シェイクスピアはわれらの同時代人」 ヤン・コット著 蜂谷昭雄(教養部助教授)喜志哲雄(教養部助教授)訳 白水社 昭43
 「ロシア経済思想史の研究」 田中真晴(経済学部教授)著 ミネルヴァ書房 昭42
 「近代物理学」改訂版 荒勝文策(名誉教授・理)編 培風館 昭43
 「情報処理とその装置」 坂井利之(工学部教授)著 日刊工業新聞社 昭42
 「情報科学講座E.19.1 パターン認識の理論」 坂井利之(工学部教授)編 共立出版 昭42
 「情報科学講座E.19.2 文字・図形の認識機械」 坂井利之(工学部教授)編 共立出版 昭42

○ Besterman, Theodore : A World Bibliography of Bibliographies ; and of bibl. catalogues, calendars, abstracts, digests, indexes, and the like. 4th ed. rev. and enl. 1965—66. 5v. (世界の書誌の書誌)

初版は1939—40年に刊行され全2巻であったが、本書は全5巻になっており、第5巻はIndexになっている。

この書誌は1470年のいわゆる incunabula より1963年にいたる世界のあらゆる分野の文献目録117,000冊の総目録を、約16,000の主題に分ちその主題のアルファベット順に収録したものである。各主題内においてはそれぞれ、その刊行の時代順に配列し、主題間の関連については十分に cross-reference をほどこして間然するところがない。Index は本巻とは異なり、主題によらず、目録の著者・編者・訳者名および図書館、文庫など団体名などすべて名前のアルファベットにしたがって配列され、索引されるのである。

本書はいわゆる所在目録ではない。読者の真の文献追跡はむしろここからはじまるのであって、その困難を思うとき、文献の所在を教え、容易にそのものを提供し得るようなセンターの確立こそ要望されるのである。